

歴史博物館建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

高松城跡

平成6年度



航空写真

1995. 3

香 川 県 教 育 委 員 会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、歴史博物館建設工事に伴い、平成6年度に実施した埋蔵文化財調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所 長	松本 豊胤
	次 長	真鍋 隆幸
総務	参 事	別枝 義昭
	係 長	土井 茂樹 (平成6年5月31日まで)
	係 長	前田 和也 (平成6年6月1日から)
主 査		大西 健司
調査	参 事	糸目 末夫
	主任文化財専門員	渡部 明夫
	文化財専門員	西村 尋文
	文化財専門員	中西 昇
	調査技術員	森澤 千尋

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同敬称省略)
財団法人松平公益会、財団法人香川県県民ホール、高松市立城内中学校
5. 本書の執筆は西村、中西、実測・製図は森澤が実施し、編集は西村が担当した。
6. 挿図の一部は、国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。

本文目次

1. 調査の経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
3. 調査概要	2
4. まとめ	10

挿図目次

図1 遺跡分布図	2
図2 遺構配置模式図	3
図3 I区遺構配置図	4
図4 石列状遺構断面図	5
図5 溝01・石室状遺構平・断面図	7
図6 溝01出土遺物	8
図7 石室状遺構出土遺物	8

写真目次

写真1 I区全景	2
写真2 I区全景	2
写真3 石列状遺構全景	5
写真4 石列状遺構近景	5
写真5 土坑04	5
写真6 瓦溜り01・02	6
写真7 溝01・石室状遺構	6
写真8 石室状遺構	6
写真9 I区石垣	9
写真10 第3トレンチ石垣	9
写真11 第3・4トレンチ礎石	10
写真12 第4トレンチ礎石	10

1. 調査の経緯と経過

香川県教育委員会は、高松市玉藻町に所在する高松城跡の中で香川県県民ホールと高松市立城内中学校に挟まれた地区に、県立歴史博物館を建設する計画を進めている。予定地は高松城東の丸跡に想定される地区であり、対象面積5,000㎡を測る。この計画を進めるにあたり香川県教育委員会は、平成5年度に試掘調査を実施し、予定地の全域が保護措置の必要であることが確認された。

その試掘結果にもとづき香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）と協議を進め、対象地の一部を平成6年度中に調査をする点で合意し、平成6年4月1日付けでセンターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結し、本年度中にセンターが調査を実施することになった。

なお、東の丸跡は、昭和60・61年度に実施した香川県県民ホール建設に伴う調査において、中世より近代にいたる数期の遺構面及び、その遺構面上からは古図に記載されている建物遺構等を確認している。

対象地を分れば、東の丸区域及び南北に配された中堀の部分とに区分できる。東の丸の部分をⅠ～Ⅳ区、堀の部分Ⅴ・Ⅵ区、合わせて6つの調査区に区分した。本年度の調査は北端部にあたるⅠ区（対象面積1,000㎡）の上層遺構のみを対象にした。また、次年度以降の調査に備えるため4本のトレンチ調査も合わせて実施した。

現地調査は平成6年4月より開始した。4月中は準備工にあたり、5月より本格的に調査を開始し、同年6月末日に終了した。なお、現地は次年度以降の調査に備えるため埋め戻しを行わず、ビニールシートで養生した。

2. 立地と環境

高松城跡は高松市玉藻町に所在する。この城跡は、高松平野の北端、香東川、詰田川、春日川等により形成された砂州上の、瀬戸内海に面した海岸に立地している近世の水城である。

高松城跡の立地する高松平野周辺の山塊には、西に石清尾山古墳群、東に屋島城跡等の香川県を代表する諸遺跡が所在するが、平野部の遺跡分布は希薄である。これらの周辺遺跡の状況及び文献資料よりみて、当時の海岸線を推定すれば、かなり高松平野の内陸部まで入りこんでいて、陸地化するのは中世以降と考えられている。なお、高松城周辺が陸地化する時期は、先の香川県県民ホール建設に伴う調査で、15世紀代の漁民の墓と推定される火葬墓群が検出されている点より、概ねこの時期以前に遡るものと考えられる。

高松城の歴史は天正15（1587）年生駒親正の入封により始まる。翌年築城を開始し数年を要して完成したのが旧高松城である。その後、松平頼重による寛文12（1672）年東の丸造成以降、米蔵丸・作事丸として当該地が城内に組み込まれることになる。この時期が現高松城の原形が完成する時期にあたる。

明治2（1869）年の版籍奉還後、所管していた陸軍省から同23（1890）年旧藩主松平家に払い下げられた。その後、明治23年前後には東の丸の建物の大半が壊される。明治30年代から昭和3（1928）年にかけての現高松港の築工事により周辺が埋め立てられ、東の丸に隣接する中堀も、大正期には埋め込まれ現在に至っている。

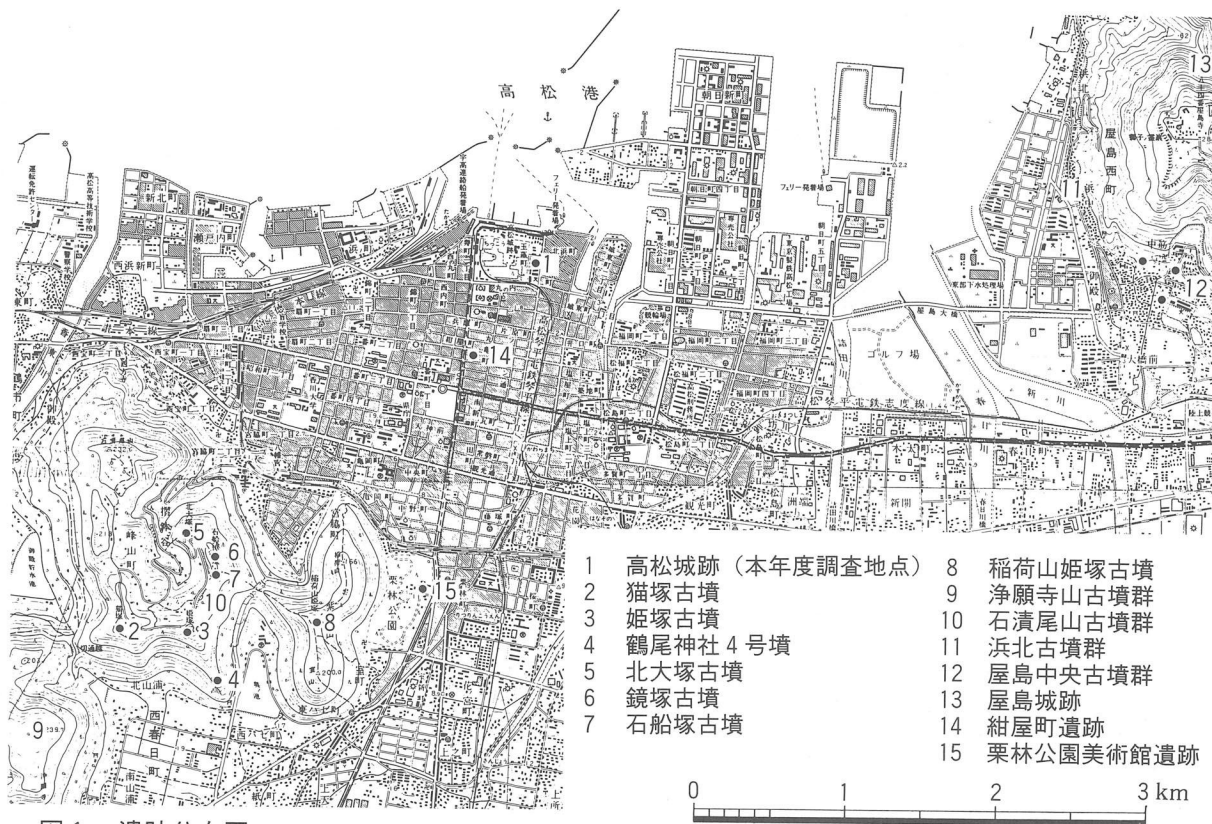


図1 遺跡分布図

3. 調査概要

調査対象5,000㎡のうち、本年度は北端のⅠ区、面積1,000㎡の調査及び小範囲の4本のトレンチ調査を実施した。なお、先にも触れたがⅠ区の調査は複数遺構面のうち、上位遺構面のみを対象にしている。

Ⅰ区西半部では、石列状遺構及び礎石群を検出した。また、石列状遺構の南側では整地層が拡がり、上位より土坑、ピット、下位より瓦溜り等の遺構を検出した。東半部では、石組みの溝状遺構及びそれから分岐する石室状遺構を検出した。なお、調査区東端では、香川県民ホールよりつづく石垣を検出した。トレンチ調査では、礎石の可能性の高い遺構を数地点より、また、第3トレンチでは対象地東に南北に位置する中堀の調査を実施した。次にこれらの遺構から主要なものを紹介する。

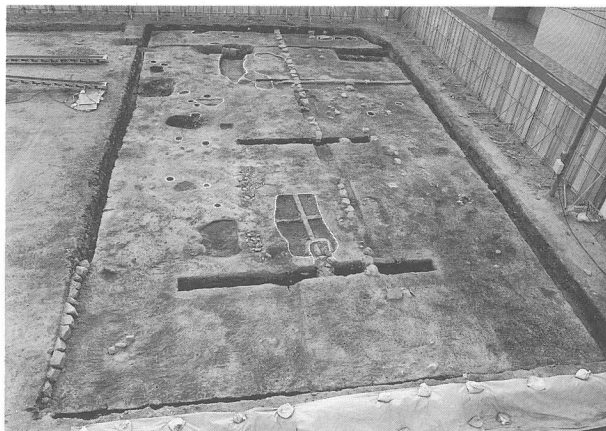


写真1 Ⅰ区全景（東より）

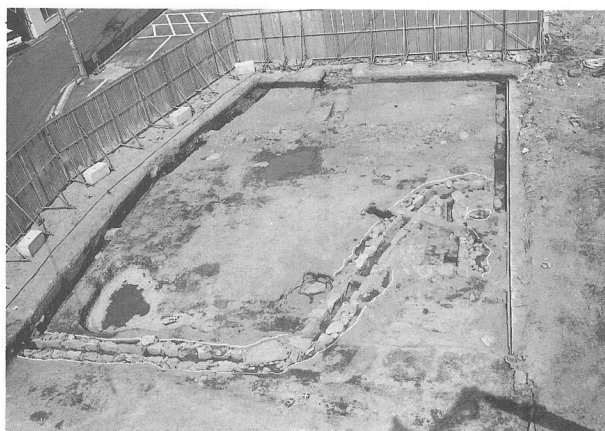
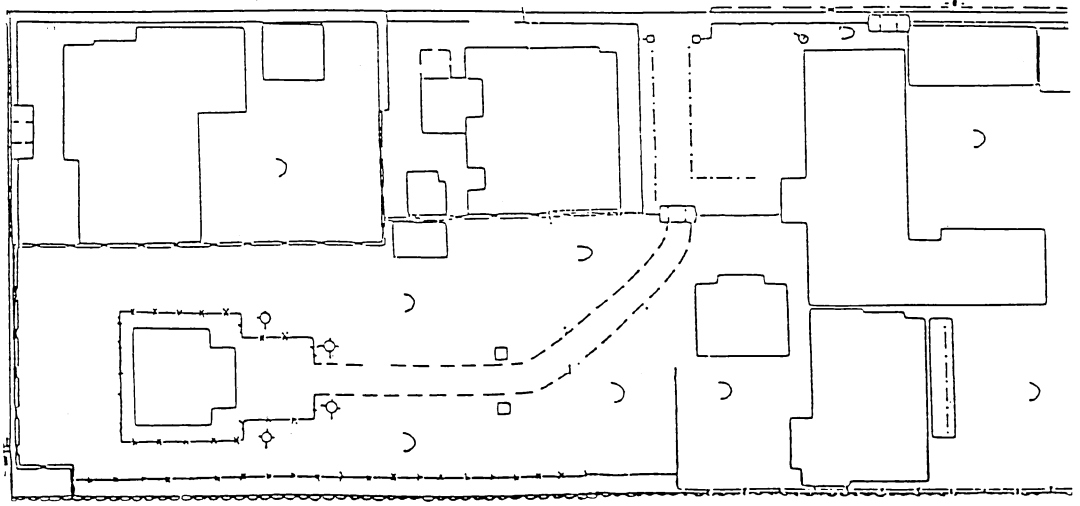
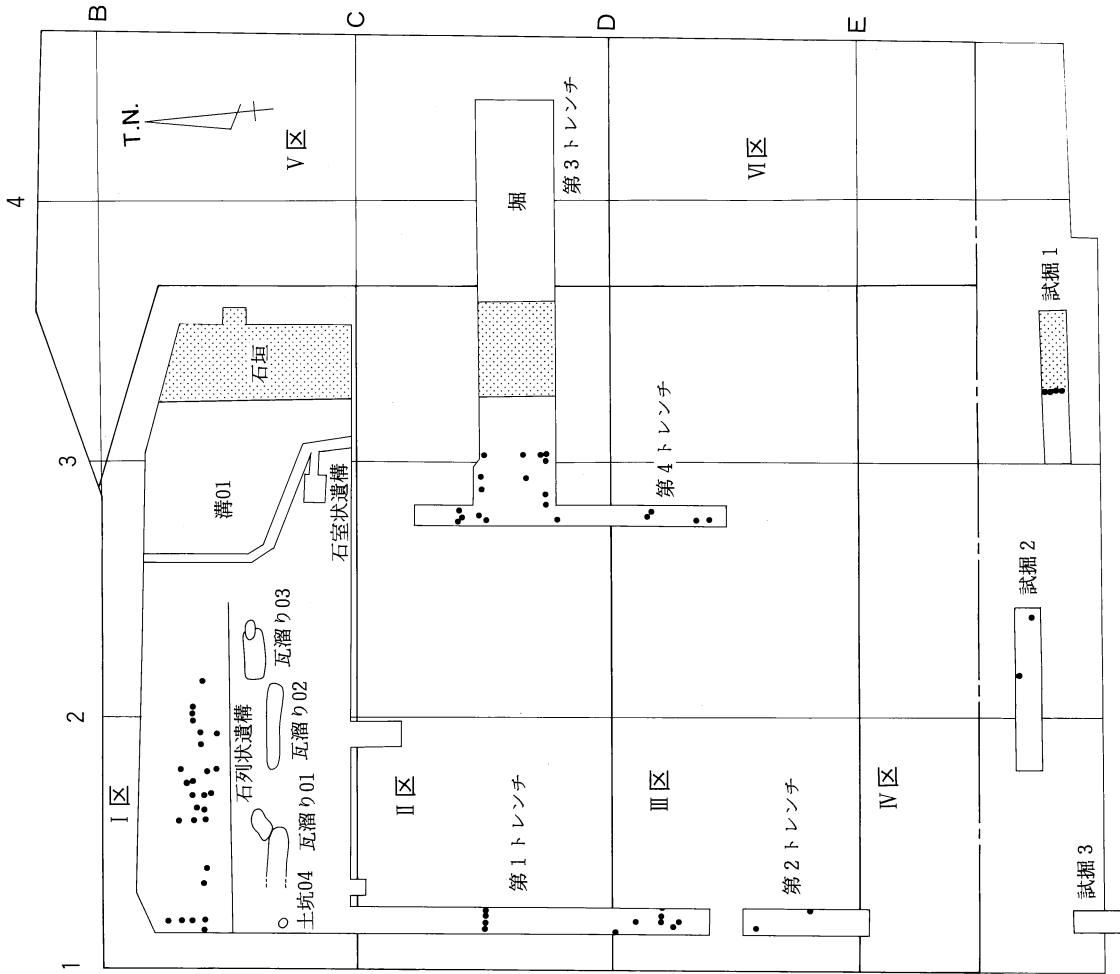


写真2 Ⅰ区全景（西より）



※試掘1～3：平成5年度香川県教育委員会試掘

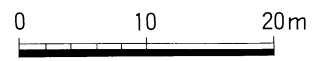


図2 遺構配置模式図

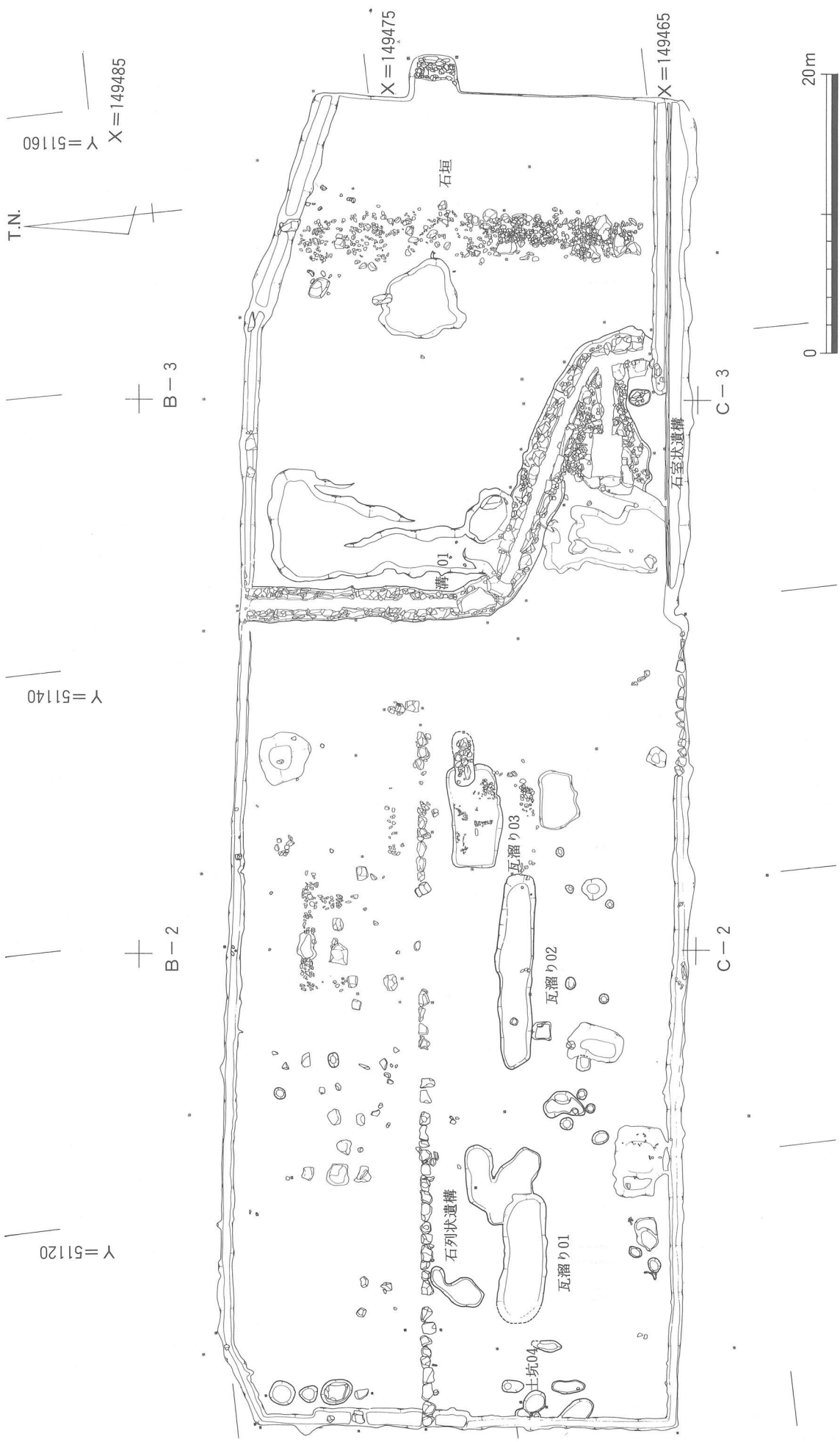


図3 I区遺構配置図

石列状遺構

B1・2区で検出した。合計38の石を、直線状に東西に配した遺構である。西端は調査区外にまで延びていて確認できない。東端は攪乱等で欠落しているのが不明であるが、端部周辺の三石が北に方向を転じていることから概ねその地点までと考えると、検出長約26mを測る。主軸はN-84°-Wに方位をとる。石材は安山岩系ないしは花崗岩系の、長さ50~60cm、幅30~40cm、厚さ30cm前後の自然石を使用している。石列上面を平坦面に、また、北に面を揃えている。石列南側は石列上面近くまで盛土整地されていたことが土層から観察できるため、土地区画の外縁ないしは土塀の基礎等の可能性が高い。なお、この石列状遺構の北側には、約3.0m隔てて礎石状の石が3石、8.0mおきに東西に並んでおり、関連性が窺える。

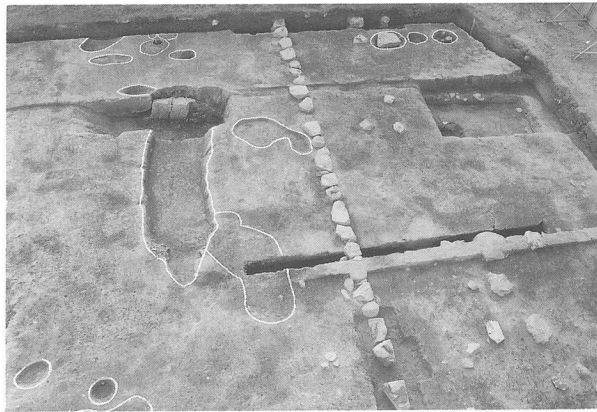


写真3 石列状遺構全景（東より）

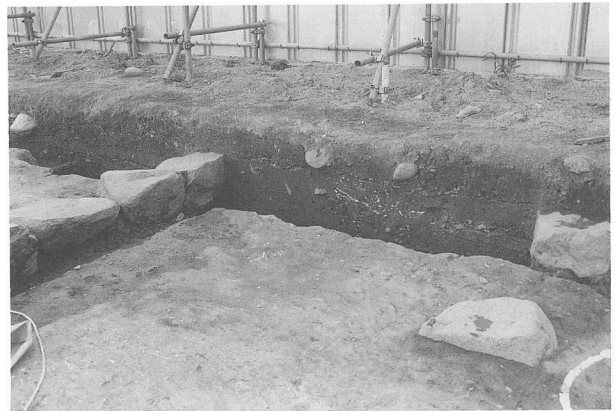


写真4 石列状遺構近景（東より）

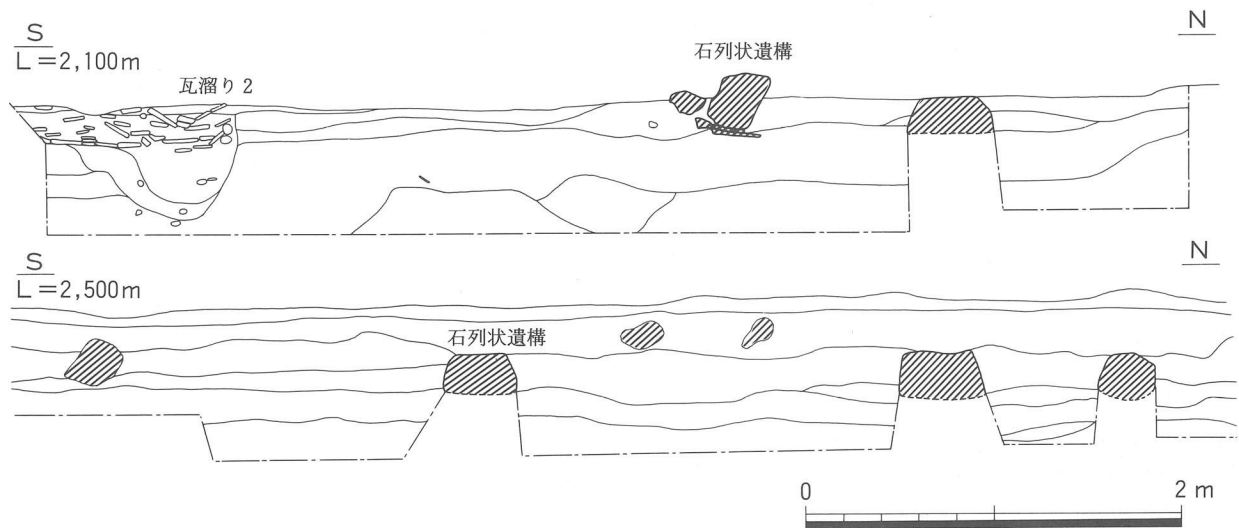


図4 石列状遺構断面図

土坑04

I区の西端B1区から検出した、不整円形を呈する土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.3mを測る。土坑中央部に植木鉢状の土師質の土器が、口縁部を下に向け、土坑との隙間を瓦の碎片で充填された状態で検出した。出土遺物としては先に触れた植木鉢状の土器、瓦の碎片等と伴に少量であるがタイル片及び土管片が出土していることから、時期的には明治以降



写真5 土坑04（東より）

の遺構であろう。

瓦溜り01・02

両遺構とも石列状遺構の南，B1・2区に位置し，東西主軸の長楕円形状を呈する瓦溜り状の遺構である。また，石列状遺構の整地層の一部が上面を薄く被覆しており，同遺構の築造に伴う遺構と考えられる。瓦溜り01は長径約4.5m，短径約1.5m，深さ約0.4mを測る。主軸方位はN-79°-Wに向く。出土遺物としてはコンテナ94箱の瓦の碎片及び少量の陶磁器片が出土した。瓦溜り02は長径約7.0m，短径約1.3m，深さ0.6mを測る。主軸方位はN-82°-Wに向く。出土遺物としてはコンテナ52箱の瓦の碎片及び少量の陶器，土師器片が出土した。

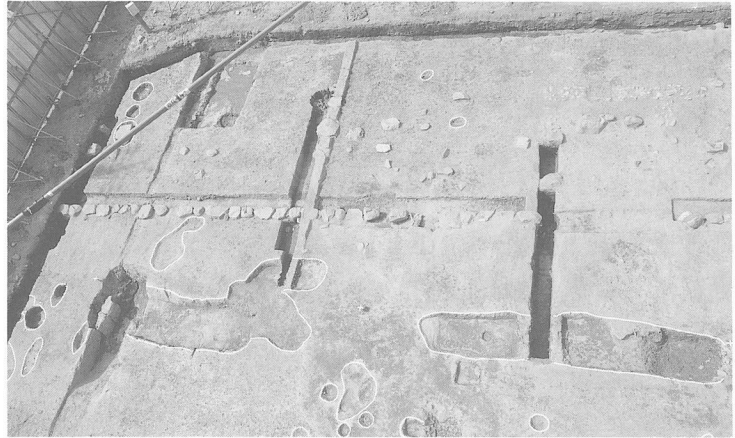


写真6 瓦溜り01・02（南より）

溝01

I区東半部B2・3区で検出したクランク状に延びる石組溝である。B3区南西隅から3.0m北に延び，石室状遺構と分岐する地点で屈曲し約9.0m北西に延び，B2区で再度屈曲して北に延びる。後者の屈曲部分には平坦な蓋石を2石配している。状況より橋として機能していた可能性が高い。検出長20.0m，幅約0.3m，深さ約0.3mを測る。南北方向に延びる部分の主軸方位はN-6°-Eを測る。構造上側面は石組，底面はよく叩き締めた粘性土を貼り込んでいる。石材は北半部は板状，南半部は塊状の自然石を多用している。また，大半が安山岩系で，一部花崗岩も含まれる。南端と北端の比高差は約0.2mを測り，北に向かって流れる水路と考えられる。なお，この遺構は，調査区北側の市道を隔てて，昭和60年度の香川県民ホール建設に伴う調査の際に検出したSD04に連続する可能性が高い。

出土遺物としては瓦，陶磁器片がコンテナ3箱出土している。代表的な遺物12点を抽出した。(図6-1・9・11)は埋土(4・5・7)は掘形，他は覆土から出土した。(1・2)は高台部を欠く瀬戸・美濃系の陶器碗である。(1)は内外面ともに漆黒色の釉を施している。(3)は肥前系の皿底部である。(4)は青磁皿の底部(5・7)は唐津焼灰釉皿の底部である。なお，(5)の内面には砂目が認められる。(6)は瀬戸・美濃系の陶器の皿(8)は唐津焼碗の底部である。(9)は内・



写真7 溝01・石室状遺構（南より）



写真8 石室状遺構（西より）

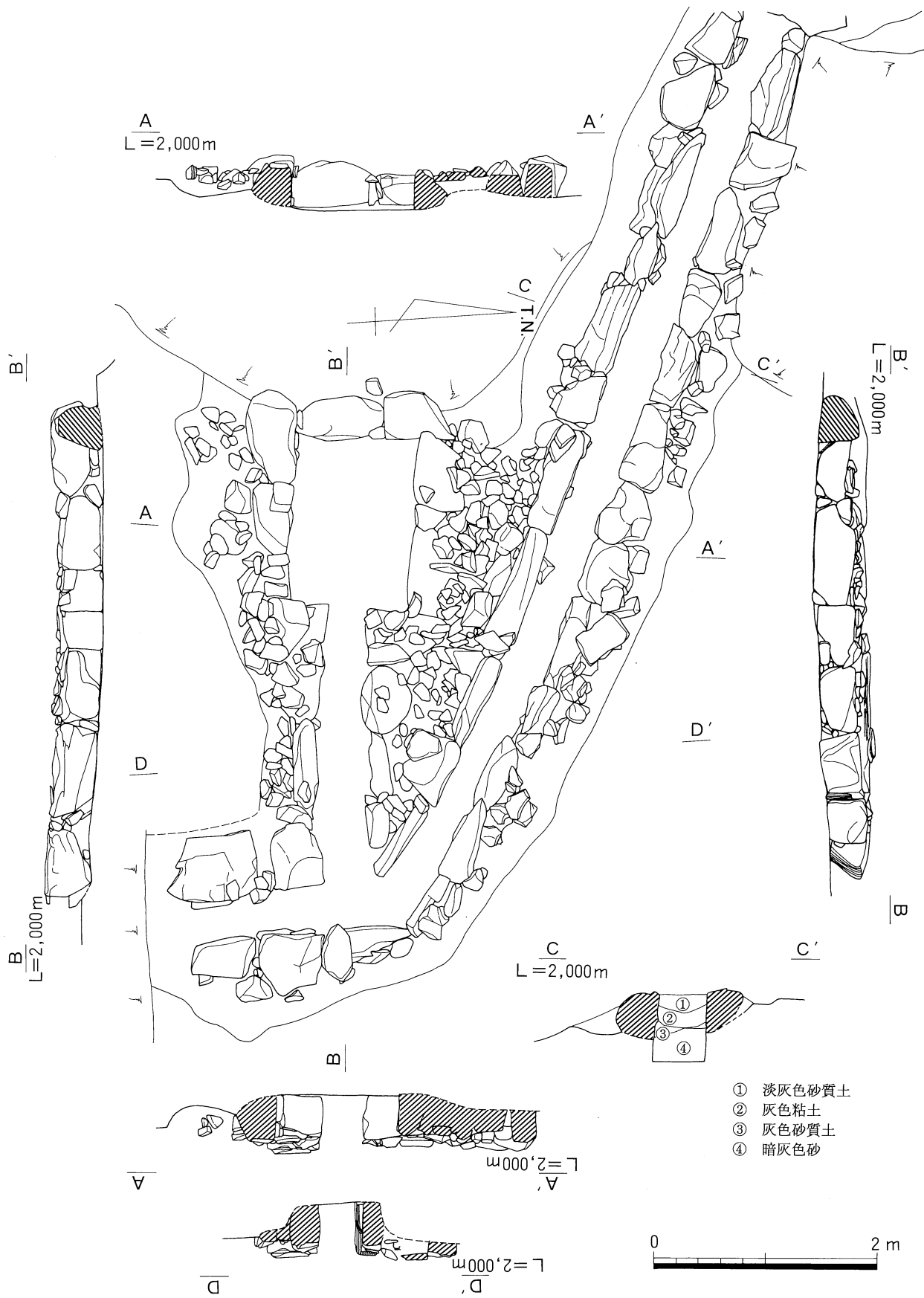


图5 溝01·石室状遺構 平·断面図

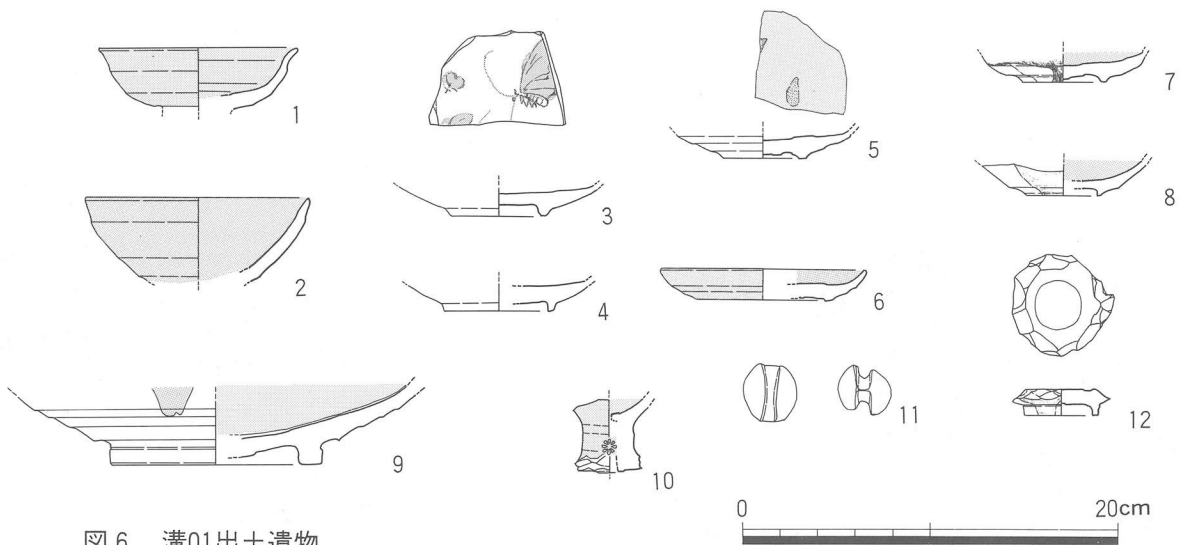


图6 溝01出土遺物

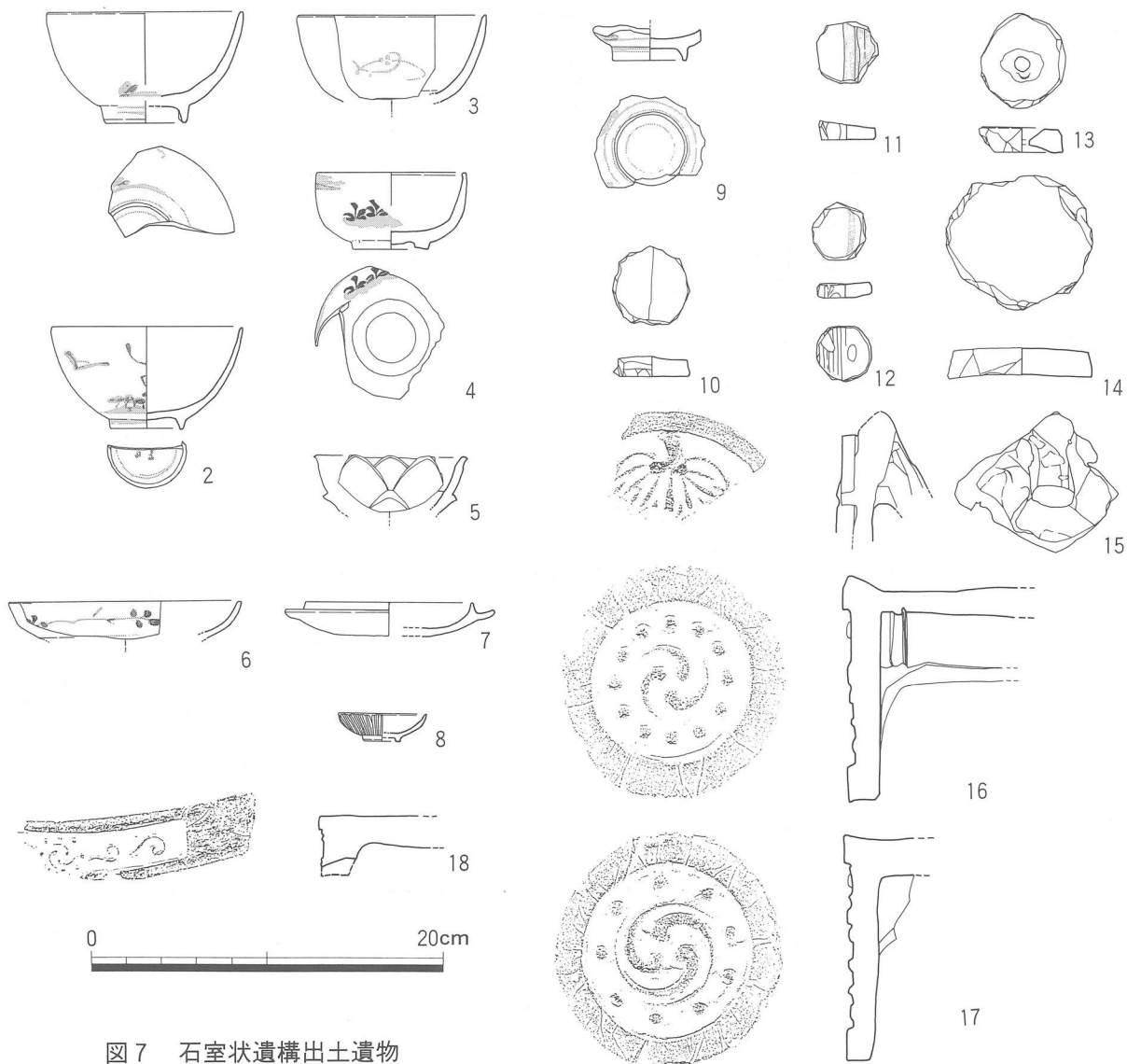


图7 石室状遺構出土遺物

外面乳白色の釉を施す大皿の底部である。(10)は形状より推定して、陶器の仏飯器の脚部であろう。(11)は土師質の有溝土錘である。(12)は肥前系碗の高台部を用いた土製円盤である。内面には見込み蛇ノ目釉ハギが認められる。

石室状遺構

I区東半部B2・3区で検出した、溝01より西に分岐する石組み遺構である。形状は古墳時代の天井石の失われた横穴式石室に似ていて、溝01より西に分岐する溝の部分と、溝の先に付属する石室の部分とに区分できる。構造上側面は石組、底面はよく叩き締めた粘性土を貼り込んでいる。石室状遺構と溝01との間には拳大の角礫を裏込め石として充填している。

溝の部分は長さ2.5m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。石室の部分は長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.4m、溝の部分を含めた主軸方位はN-83°-Wを測る。

出土遺物としては瓦、陶磁器片がコンテナ15箱出土したが、主体を占めるのは瓦片である。代表的な遺物18点を抽出した。(図7-1~4)は肥前系の碗である。(5)は白磁の碗である。外面蓮の模様をかたどる。(6)は底部を欠く肥前系の皿である。(7)は形状より推定して備前焼の灯明皿と考える。(8)は白磁の紅皿である。(9・11~14)は土製円盤である。(9)は肥前系の碗の底部を用いた土製円盤である。(11・12)は陶器片、(13・14)瓦片を用いている。なお、(13)には中央部に穿孔が認められる。(10)は安山岩製の石製円盤である。(15~17)は軒丸瓦である。(15)の瓦頭部分には葵紋を施している。(16・17)の瓦頭部分には巴紋を施している。(18)は軒平瓦の瓦頭部分である。

石垣、堀

香川県県民ホールより続く南北方向の石垣を、I区の東B3区と第3トレンチの2地点で検出した。なお、第3トレンチでは中堀の状況をつかむトレンチ調査を、石垣の調査と合わせて実施した。

I区のB3区では石垣西面の基底部及び東面の一部を検出した。西面の基底部は、長さ12.0m、幅1.5mの範囲で南北に細長く帯状に検出した。北半部にくらべ南半部は比較的残りが良い。東西両側縁には径0.5~0.8mの自然石を配し中央部には拳大の円礫を敷いている。東面は、裏込め石の一部を確認した。

第3トレンチでは石垣西面の基底部及び東面を検出した。西面では基底石1段分を検出した。東面では現地表下約4.5mまで掘削したが、石垣基底部を確認するには至っていない。検出した石垣は、安山岩、花崗岩系の切り石及び自然石を7~8段積み上げたものである。上位より2段分は石材を横長方向に比較的丁寧に積みあげ、3段以下は比較的荒く野面積状に積み上げている。なお、上端から2.4mの深さの石垣表面には、貝殻の付着が認められ当時の海水面を想定できる。



写真9 I区石垣(南より)



写真10 第3トレンチ石垣(東より)

第3トレンチでは、石垣の状況とともに堀の調査を実施した。掘削は地表下4.5mまで下げたが最深部まで至っていない。埋土は大別して3層に区分できる。上層より①埋戻し土が約0.6m、②淡灰色細砂層が約3.0m、③淡黒色シルト層が約0.9m堆積しているのを確認した。なお、②層中からはガラス瓶、煉瓦等が出土している。③層中からは大型の木材片等が出土している。

礎石

I区及び4本のトレンチ中より約50基の、礎石の可能性のある自然石及び切り石を検出した。第1トレンチからは2、3石で構成される石列状の遺構2条。第3・4トレンチC2区からは建物跡の可能性が高い礎石列。第4トレンチD2区からは南北方向に主軸を揃えた方形切り石4石を検出した。

いずれの資料とも小範囲の中での成果であるため、遺構の性格などは今後の調査によるところが多く、現状では配列などを明らかにしがたい。なお、図2中にその分布を記載しているので参照していただきたい。

4. まとめ

本年度の高松城跡の調査成果を簡単にまとめる。

石列状遺構は、慶応二年銘の高松城古図及び鎌田共済会所蔵の推定明治10年高松城図に記載されている長大な倉庫に位置的に類似し、関連する遺構と考えられる。建物の対辺が確認されないため建物礎石と考えるより、建物遺構の周辺部に配された土地区画の外縁、あるいは土塀の基礎等の考えが出来る。時期的には同一遺構面上で検出された溝01、石室状遺構等と類似するものと考えられる。

溝01は先にも触れたが香川県県民ホールの調査時に検出したSD04に連続する可能性が高い。SD04は先の古図に記載されている東門塀跡に伴う遺構と考えられている。古図の記載では対象地北東隅に中堀を渡る橋の記載がある。東門は東の丸の入り口で、その西側に北に開く鍵状の塀が記載されている。先の香川県県民ホールの調査の際にはその北端の部分が検出されており、本年度の調査区にも延びる可能性が考えられていた。しかし、今回の調査で検出されなかった点より、おそらく対象地と香川県県民ホールとの境界に所在する、市道の下で東方向へ屈曲するものと考えられる。

石室状遺構は溝01と時期的にさほど差がない点と、切り合いが認められない点より溝01に付属する施設と考えられ、性格的には水蓄めの機能が考えられる。

溝01、石室状遺構から出土している陶磁器類は、17世紀から18世紀代までの時期幅がある。最も新しい時期をもって一応18世紀後半頃が下限と考えられるが、明治10年の高松城図に東門土塀が



写真11 第3・4トレンチ礎石（西より）



写真12 第4トレンチ礎石（南より）

残っているので、その時期まで存続する可能性がある。上限は次年度以降に行なわれる、下層遺構面の調査成果を基に検討すべきであろう。

石垣及び中堀の遺構は、先の古図資料及び香川県教育委員会の試掘調査結果により、対象地の東辺を南北に横断する可能性があったが、本年度の調査で北端より南端まで良好に残存している見方がより強くなった。なお、石垣は上位と下位の石積みの状況が異なるため構築後補修された可能性がある。最深部までの調査を実施していないので、時期、構築法など不明な点が多いが、次年度以降の調査の課題になろう。

以上簡単であるが、調査成果をまとめた。

(参考文献)

香川県教育委員会 1983.3 高松城東の丸跡発掘調査報告書

歴史博物館建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

高松城跡

平成6年度

平成7年3月31日

編集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 株式会社 美巧社